

インドネシアにおけるムスリム女性の イスラーム改革運動に関する覚書 —アイシヤーを事例として—

利 光 正 文

はじめに

インドネシアのイスラーム改革団体ムハマディヤー (Muhammadiyah ムハンマドに従う者) は、1912年 K.H. アフマド・ダフランにより中部ジャワの古都ジョクジャカルタに於いて設立された。ダフランはコーランとハディース (伝承) に基づき、イスラームに付着した異教的あるいは異端的要素を取り除くべく、イスラームの浄化運動を提唱した。創立者のダフラン及びムハマディヤー運動に関しては、これまで多くの研究書や論文が発表され、かなりの蓄積が見られる⁽¹⁾。ムスリム男性によって担われたこの運動は、主として都市部を中心に拡大し、当時のオランダ領東インドのかなりの地域に支部やグループを擁するようになる。そしてこの運動は、現在も、尚、連綿として継続されている。

これに対し、ムスリム女性によるイスラーム改革運動は、ともすると男性の陰に隠れがちで、その研究も立ち後れている⁽²⁾。しかし、インドネシアのイスラーム改革運動に果たした女性の役割は看過されるべきでなく、正しい評価が与えられてしかるべきだと思われる。小稿では、ムハマディヤーの女性組織として設立され、後に独立した組織となってイスラーム改革運動の一翼を担ったアイシヤー (Aisyiyah) を取り上げ、考察を加える。

— アイシヤーの成立

ムハマディヤーの女性組織アイシヤーの前身として、ソポ・トレスノ (Sopo Tresno) が1914年に組織されていた⁽³⁾。この組織の実態については詳しく分からないが、それがアイシヤーと改名され、組織としての体裁を整えるのは1917年のことである。アイシヤーの形成にあたっては、ムハマディヤー本部副会長の任にあった K.H. モフタルの肝いりで実現している。アイシヤー役員は以下の人物であった。

アイシヤー役員 (1917年)

委員長	シティ・バリアー	補 佐	シティ・ダララー
書 記	シティ・バディラー	"	シティ・ワディンガー
会 計	シティ・アミナー・ハロウイ	"	シティ・ダウイマー
補 佐	ニヤイ・H.アブドゥルラー	"	シティ・ブシロ
"	ニヤイ・ファティマー・ワソール ⁽⁴⁾		

上記役員の内、シティ・バリアー、シティ・バディラー、シティ・ダララー、シティ・ダウイマーの4名は、K.H. アフマド・ダフランがムハマディヤー創立後、自宅でイスラームを教授した女子塾生6名の中に含まれていた⁽⁵⁾。

さて、K.H. アフマド・ダフランは、1923年2月23日ジョクジャカルタの自宅において55年の生涯を閉じる。ムハマディヤー運動の拡大を目指し東奔西走する中で病を得、無理がたたっての死であった。1961年12月27日、時のスカルノ政府により、彼は民族運動英雄の一人に列せられた⁽⁶⁾。同じく、死後、民族運動英雄とされたのがダフランの妻、シティ・ワリダーである⁽⁷⁾。彼女はニヤイ(Nyai)・ダフラン(ダフラン夫人)と通称され、夫の死後アイシヤーと深く関わり、アイシヤーの顔としてアイシヤー運動の基礎を確立する。そこで先ず、シティ・ワリダーがアイシヤーと関わるまでを略記する。

シティ・ワリダーは、1872年ジョクジャカルタに生まれた。彼女の父 H. ムハマッド・ファドゥリルはクラトン(王宮)の宗教役人(ブンフル)を務めるとともに、ウラマー(イスラーム教師)としても有名であった。シティ・ワリダーはいわば宗教エリートの出自と言えよう。彼女は自宅において父よりコーランやイスラームに関する知識の手ほどきを受けた。更に、彼女は当時のジャワの上流階級の娘の義務とされたピンギタン(婚前閉居)にも従った。この習慣は、嫁入り前の娘が外部と交際するのを禁止するとともに、通学も出来なかった⁽⁸⁾。シティ・ワリダーはピンギタンを経て、17~18才の頃いところで K.H. アフマド・ダフランと結婚した。彼女は夫との間に6人の子供を持った。育児や家事に専念するとともに、妻としても夫に献身的に尽くした。いつしか彼女はニヤイ・ダフランと呼ばれるようになった。(以後ニヤイ・ダフランと表記)

ニヤイ・ダフランが特に内助の功を発揮するのは、夫ダフランがムハマディヤーを創立して以後のことである。ムハマディヤー運動の基盤を確立するため日夜奮闘する夫の傍らにあり、苦楽を共にする。ムハマディヤー運動に対する妨害や反発がしばしば起きているが、例えば次のような出来事もあった。アフマド・ダフランがイスラーム宣教のために出かけた東部ジャワのパニューワングから戻ると、「もし勇気を持ってパニューワングを再訪したら攻撃で答え、帰るまでには屍をさらすことになり、妻は奴隷にされるかもしれないぞ。」という脅迫状が夫あてに届いた。しかし、ダフランはそれにひるむことなくパニューワングを再訪し、ニヤイ・ダフランもその旅に同行した⁽⁹⁾。パニューワングは東部ジャワの東端にあり、イスラーム伝統派の強い地域であったので、こうした事件が起きたのであろう。

ところで、ムハマディヤーを設立した当初から、K.H. アフマド・ダフランはムスリム女性の役割を重要視していたので、その組織化を図る。彼はアイシヤーを組織するにあたり、以下のような理念を掲げた。

- a. 誠意を持ってイスラームの女性として能力に見合った義務をはたし、賞賛を望むことなく、欠点のために一步退くことなく。
- b. 慈善を行うためには知識を持たねばならないということの十分な認識を持つこと。

- c. 神に対し運命を委ねられた一つの義務を回避することなく、神による戒律にそむかない基礎を創造する。
- d. イスラーム教の神聖さを守るための決心に全霊をかたむける。
- e. 仕事及び闘争に関し友との友好関係を保持する。⁽¹⁰⁾

前述の如く1917年にアイシヤーが組織され、アイシヤーの活動が開始されるのであるが、ニヤイ・ダフランは夫の奔走を支え続ける。晩年、ダフランの体は病に蝕まれてゆくが、病をおしてムハマディヤーのために犠牲を厭わなかった。そしてダフランの死後、夫の意志を継ぎ、ニヤイ・ダフランがアイシヤー運動に身を投じることとなった。

二 アイシヤーの発展

ニヤイ・ダフランがアイシヤーの委員長に就任するのは1923年6月からである。設立以来シティ・バリヤーが務めていたが、アフマド・ダフランの妻にその地位を譲る。アイシヤー本部役員は、以下の通りである。

アイシヤー役員 (1923年6月~12月末)

委員長	ニヤイ・ハジ・アフマド・ダフラン	委員	B.H. スジャ
副委員長	シティ・バリヤー	〃	B.H. ファハルディン
書記	シティ・バディラー	〃	シティ・ジャディイラー
〃	シティ・ダララー	〃	シティ・ハディヤー
会計	シティ・ファトマー	〃	シティ・ザイナー
委員	シティ・ムンジヤー	〃	シティ・サルマー
〃	B.H. ザイニ	〃	シティ・アシヤー
		〃	シティ・ジャシヤー
		〃	シティ・ウムニヤー (1923年9月まで)
		〃	シティ・ジャララー (1923年9月まで) ⁽¹¹⁾

上記中、筆頭委員のシティ・ムンジヤーは、やがてアイシヤーの若きリーダーとして頭角を表してくる。

ここで、アイシヤーの機関誌について触れる。ムハマディヤーの機関誌『スアラ・ムハマディヤー (ムハマディヤーの声)』は、既に1920年に創刊されているが、アイシヤーの機関誌『スアラ・アイシヤー (アイシヤーの声)』(以後『SA』と略記)は1926年に創刊された⁽¹²⁾。この機関誌は日本軍政期と独立戦争の時期を除き、現在まで出版され続けている。機関誌を通じ、アイシヤーはそ

の理念を会員に徹底させるとともに、ムスリム女性に対し啓蒙活動を行う雑誌として、重要な役割を果たしている。

このようにアイシヤーの組織と機関誌の充実に伴い、会員数も確定してくる。1927年、ムハマディヤーの会員数は10,274名、これに対しアイシヤーのそれは3,012名である⁽¹³⁾。ムハマディヤーの支部が作られている所には、アイシヤーの支部も必ずと言っていいほど存在しており、両者は夫唱婦随の関係と言える。そして、夫がムハマディヤー会員の場合には、妻もアイシヤーの会員である場合が多く、その連携の良さが目立つ。

さて、アイシヤー運動が進展している一方で、インドネシアにおける女性運動も各組織の連帯を図ろうとする機運が盛り上がる。こうして誕生したのが“インドネシア女性会議（Kongres Perempuan Indonesia）”である。1928年12月22-25日、ジョクジャカルタにおいて初めての会議が開かれた。この会議に参加したのは以下に掲げる7団体であった。

- 1 Wnita Utomo（美しい女性）
- 2 Wanita Taman Siswa（学童の園の女性）
- 3 Puteri Indonesia（インドネシア女性）
- 4 Aisjijah（アイシヤー）
- 5 Jong Islamieten Bond bg. Wanita（青年イスラーム同盟女性部）
- 6 Wanita Katholik（カトリック女性）
- 7 Jong Java bg. Wanita（青年ジャワ女性部）

会議の目的は、①インドネシア女性の協会の中の緊密な関係が生まれるように、②女性の義務、需要そして発展の問題について協力して話し合いが出来るように、と言うものであった。会議の議長には R.A. スコント、副議長にアイシヤーのシティ・ムンジャーが就いた⁽¹⁴⁾。この団体がその後どのような活動をしたかについてはここで触れる余裕がないので、今後の課題としたい。しかし、いずれにしてもアイシヤーが重要な位置を占めていることだけは、確かなようである。

ここで、その後のアイシヤーとニャイ・ダフランについて記述を進める。ムハマディヤーは1912年に設立されて以来、毎年会議を開いて来た。ただし、支部の拡大が最初はジャワにかぎられていたので、1929年まではジャワの都市で開催していた。ジャワ以外の地、所謂外領での開催は、1930年の第19回ブキティンギ会議（西スマトラ）からであった。ムハマディヤーの大会と同時並行的にアイシヤーもブキティンギで会議を開く。西スマトラはミナンカバウ地方と呼ばれ、パドリ運動に代表されるように、インドネシアにおいてはイスラーム改革運動の先進地であった⁽¹⁵⁾。従って、ムハマディヤーの組織が1925年5月29日にはスンガイバタン・タンジュンサニにおいて産声を上げている。そして、翌26年6月2日商業都市パダン・パンジャンにおいてムハマディヤー支部が誕生した⁽¹⁶⁾。その後支部が増加し、1930年の会議にこぎつけたわけである。当然、アイシヤーも同様の歩みをたどっている。

アイシヤー会議は、1930年3月14-19日までブキティンギで開かれた。この会議には、29のア

イシヤー支部とグループが代表を派遣した。その内訳は、ジャワから8、スマトラから6、そしてミナンカバウから15であった。アイシヤー本部からは、ニヤイ・ダフラン、シティ・ムンジャー、シティ・ハイナー、シティ・ファトマー、シティ・アイシヤー、シティ・ラフマー、シティ・ダロヤー、シティ・ワルディヤーの8名が出席した⁽¹⁷⁾。会議にはのべ5,000人の女性が参加しており⁽¹⁸⁾、関心の高さを示した。ニヤイ・ダフランが会議を主宰し、彼女の知名度は増した。この会議で決議された事の一つは、反文盲主義についてであった。即ち、読み書きの講座を実施し、アラビア文字、ラテン文字あるいはプゴン（アラビア文字で書かれたジャワ語）を教授すること。特に、ラテン文字の学習が必須となっていた。加えて、アイシヤー奨学金の設置。更に、『SA』の内容についても次のように決められた。①宗教、②アイシヤーについての報道、③運動の外部への広がりについての報道、④教育、⑤料理と菓⁽¹⁹⁾。

上記の如く、プキティンギにおけるアイシヤー会議について簡単に述べたが、ジャワ以外の地で初めて開かれた会議は大勢の参加者を集め、盛況であった。以後、アイシヤー運動は外領での更なる広がりを見せる。1932年には、アイシヤーの支部及びグループはジャワからスマトラ、ボルネオ、セレベスと広がり、その数160、会員数は14,467人に達していた⁽²⁰⁾。翌年、アイシヤーはムハマディヤーに習いコンスル（全権代理）制を導入する。支部が多い所をダエラー（地域）としてくくり、コンスルを置いた。導入されたダエラーは、ソロ（中部ジャワ）、バニユマス（中部ジャワ）、プカロンガン（中部ジャワ）、パスルアン（東ジャワ）、東スマトラ、スマラン（中部ジャワ）、ランボン・パレンバン（南スマトラ）、の7つであった⁽²¹⁾。

所で、1923年以来アイシヤーの議長を務めていたニヤイ・ダフランは、議長の任をいつ交代したのであろうか。ムハマディヤー本部が出している『ニヤイ・A. ダフランの履歴』によると、ニヤイ・ダフランがアイシヤー議長を退任したのは1934年ジョクジャカルタで開かれた第23回会議の折とされている⁽²²⁾が、1932年南セレベスのマカッサルで開かれたアイシヤー会議において、シティ・ムンジャーに議長職をバトンタッチしている⁽²³⁾。

その後、1939-1940年にかけてのアイシヤーの会員数は17,616名に増加した⁽²⁴⁾。この当時のアイシヤー議長はアイシヤー・ヒラルが勤めていた⁽²⁵⁾。既にアイシヤーの長老となっていたニヤイ・ダフランは1940年頃よりリュウマチを患い、公の場には姿をみせなくなる。ただ、太平洋戦争の勃発とともに1942年日本軍がインドネシアを占領、日本軍政の下ムハマディヤーやアイシヤーの活動は停止状態となり、混乱した時代へと入る。その様な激動期の1946年5月31日、ニヤイ・ダフランはジョクジャカルタにおいて波乱に満ちた生涯を閉じる。享年74才。

おわりに

以上、主としてアイシヤーの設立と発展の経過をニヤイ・ダフランの歩みとダブらせながら見て

来た。前述のようにニヤイ・ダフランはアイシヤーの顔としてアイシヤー運動をリードし、アイシヤーの基礎を確立した人物としてその功績は大である。彼女はまたムハマディヤーの母としても知られており、夫ダフランを支えながらイスラーム改革運動の礎としての役割も果たして来た。小稿において、アイシヤーが産声を上げ、組織を整えて行く経過はある程度解明出来たのではないかと思う。しかし、アイシヤーの理念や目的及び活動内容の詳細については触れる余裕がなかったので、稿を改めて論ずるつもりである。

最後に、ムスリム女性によるイスラーム改革運動の研究は、まだ緒についたばかりであろう。解明すべき課題は多いと思われるので、今後の更なる研究の蓄積が待たれる。

註

- (1) 代表的な研究として、Alfian, MUHAMMADIYAH: The Political Behavior of a Muslim Modernist Organization under Dutch Colonialism, Gadjah Mada University Press, 1989. Yusuf Abdullah Puar, perjuangan dan pengabdian MUHAMMADIYAH, Pustaka Antara PT Jakarta, 1989. SEJARAH MUHAMMADIYAH, Majelis Pustaka Pimpinan Pusat Muhammadiyah, 1995.
- (2) Baroroh Baried, Islam and the Modernization of Indonesian Women, edited by Taufik Abdullah & Sharon Siddique, Islam and Society in Southeast Asia, Institute of Southeast Asian Studies, Pasir Panjang, Singapore, 1986. 服部美奈『インドネシアの近代女子教育』勁草書房 2001年。
- (3) Riwayat Hidup NJAI AHMAD DAHLAN, Pimpinan Pusat Muhammadiyah Urusan Dokumentasi dan Sedjarah, Jogjakarta, 1968, p.11.
- (4) Drs. Suratmin, Nyai AHMAD DAHLAN, Departemen Pendidikan dan Kebudayaan Direktorat Sejarah dan Nilai Traditional proyek Inventarisasi dan Dokumentasi Sejarah Nasional, 1981/1982, p.63.
- (5) Ibid., p.61.
- (6) Album Pelajaran Sejarah Perjuangan Bangsa, DITERBITKAN "DR" SOLO, 1984, p. 27.
- (7) Ibid., p. 68.
- (8) Riwayat Hidup NJAI AHMAD DAHLAN, op. cit., pp. 8-9.
- (9) ibid., p.12.
- (10) Drs. Suratmin, op. cit., p.64.
- (11) Verslag Muhammadiyah di Hindia-Timoer, Pengeroes Besar Moehammadiyah di Djokjakarta, Januari-December 1923, p.35.

- (12) 15Tahoenan Soeara 'Aisjijah, Pen-goeroes Soeara 'Aisjijah, Djokjakarta, 1931, p.11.
- (13) Berita Tahoenan Moehammadijah Hindia Timoer Tahoen 1927, Pengoeroes besar Moehammadijah, Landsdrukkerij-1929- Weltevreden, p.43.
- (14) Buku Peringatan 30 Tahun Kesatuan Pergerakan Wanita Indonesia 22 Des.1928-22 Des.1958, Merdeka melaksanakan Dharma, 1959?, p.19.
- (15) この事については、Za'im Rais, The Minangkabau Traditionalists' Response to the Modernist Movement, A Thesis Submitted to the Faculty of Graduate Studies and Research in partial fulfillment of the requirements for the degree of Master of Arts, Institute of Islamic Studies McGill University, Montreal, Canada, 1994. を参照されたい。
- (16) Dr. Hamka, Muhammadiyah di Minangkabau, Yayasan Nurul Islam (Panji Masyarakat), Jakarta, 1974, p.36.
- (17) Peringatan Congres Moehammadijah Minangkabau ke XIX, Hoofd-Comite Congres Moehammadijah, Djokjakarta, 1930, p.83.
- (18) Ibid., p.95.
- (19) Ibid., pp.122-123.
- (20) Pemandangan 'Alam Islam dan Moehammadijah, H.B. Moehammadijah, Djokjakarta, 1932, p.106.
- (21) Soeara 'Aisjijah, Moehammadijah bg. 'Aisjijah Hindia-Timoer, Aug.-Sept. 1933, p.189.
- (22) Riwayat Hidup NJAI AHMAD DAHLAN, op.cit., p.11.
- (23) Soeara 'Aisjijah September 1932, op.cit., p.175.
- (24) Almanak Moehammadijah 1939-1940 M, H.B. Moehammadijah Madjlis Taman Poestaka, Djokjakarta, p.224.
- (25) Soeara 'Aisjijah, op. cit. , p.77.